

ノルウェー在住の交換留学生に対する日本語教育の実践 -オスロ大学生が自然な日本語に触れるための工夫-

Practice of Japanese Language Education for Exchange Students Living in Norway
How to Help Students from University of Oslo to Experience Natural Japanese Expressions.

池田菜採子 (名城大学 外国語学部)

IKEDA, Natsuko, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

渡邊芽依 (名城大学 外国語学部)

WATANABE, Mei, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

要約

新型コロナウイルスの水際対策が強化され、交換留学生が入国できない状況が続いている。名城大学にもノルウェーの国立オスロ大学から交換留学生が来日予定だったが叶わず、オンラインで日本語授業が実施されることになった。来日できていれば日本で暮らし、日本の大学生と交流し、そうした経験は日本語習得に大きく寄与したであろう。しかし来日できない状況では、教室外で自然な日本語に触れるという肝心な部分が欠落してしまう。その部分を少しでも補うため、筆者は外国語学部 3 年渡邊芽依さんと共に様々な取り組みを行った。本稿は、ノルウェー在住の交換留学生が少しでも自然な日本語に触れるための小さな工夫を書いたものである。

The situation of exchange students being unable to enter Japan due to the strengthening border enforcement measures for preventing the spread of COVID-19 continues. At Meijo University, exchange students from the National University of Oslo in Norway were scheduled to come to Japan, but was unable to make it. We had to give Japanese Language classes so Japanese language online. If they had been able to come to Japan, they would have lived in Japan, interacted with Japanese students, and such experience would have greatly contributed to their learning of Japanese. However, in this situation where students cannot come to Japan, the essential part of experiencing natural Japanese expressions outside the classrooms is missing. In order to make up for it, I worked with Mei Watanabe, a third-year student in the Faculty of Foreign Languages, on a variety of projects. This article describes some of the small ways in which the exchange students living in Norway have been able to experience natural Japanese expressions.

キーワード：日本語教育, オンライン授業, 交換留学, 異文化交流, COVID-19

1. はじめに

新型コロナウイルスの水際対策が強化され、2021年1月13日より全世界からの交換留学生が入国できない状況が続いている。当初、名城大学には、協定大学であるノルウェーの国立オスロ大学から10人の交換留学生が来日予定だったが、それも叶わなかった。結局、オスロ大学への日本語科目はオンライン授業という形で実施されることになった。本稿は、オスロ大学の交換留学生8人に対して行ったオンライン授業の実践報告である。

2. 先行研究

留学生が来日できない中で、国外にいる留学生に対してどのように日本語教育を実施すべきかについては、今年2021年に入ってから様々な実践報告がなされている。これは日本国内で日本語教育に従事する者なら誰もが直面している課題であると言えよう。先行研究では、授業の方法をめぐって幅広い議論が交わされている。対面授業とオンライン授業の違いについて、吉田（2021）は教育の機会、授業への参加、学習の進め方、健康への配慮の観点から特徴を分析し、その両者に利点、課題点があることを考察している。その中で、例えば授業への参加について、対面授業であれば「教師や学生が直接的なコミュニケーションを取ることができる」が、オンライン授業の場合「教師や学生のコミュニケーションの機会が限られる」（吉田, 2021, p. 46）と述べ、オンライン授業でのコミュニケーションの難しさを指摘する。その一方で、コロナ禍だからこそ発想を変換し、「従来型の授業ではできなかったことがオンライン形式で可能になるかもしれない」（西野・布村・金山, 2021, p. 33）とオンライン授業を積極的選択として受け止めている報告も見られる。またオンライン授業の学習者側の利点として「自分の部屋で各自のペースで勉強できる」「予習・復習・宿題がやりやすい」（ヴァンバーレン, 2021, p. 47）などが挙げられている。このように対面授業、オンライン授業については日本語教育従事者の中にも様々な見解があることがわかる。

このような状況の中で色々な実践が行われており、例えば西野・布村・金山（2021）はインタビュープロジェクトを報告している。これは周囲の人に健康についてインタビューを行い、その結果をもとにクラス内でプレゼンテーションをするというものであった。この報告の中で、国外で受講している留学生にとって「母語でのインタビューの場合、日本語の使用機会が減ることは否めない」こと、しかしながら「国外から受講している学生が（日本語での）¹インタビュー相手を探すのは容易ではない」（西野・布村・金山, 2021, p. 37）ことを指摘している。報告数は多くないが、国外にいる留学生と日本人を交流させよう取り組みも見られる。これは留学生向け授業ではなく地域交流・連携推進事業であるが、坂本・谷・山下・内山・河川（2021）は、大学生の会話パートナーを募り、オンライン会話練習を行ったことを報告している。この中で「日本語学習において会話練習は極めて重要な活動である。学習者の中には日本人と接点が無く、日本語教室以外で日本語を話さな

い人も少なくない」(坂本・谷・山下・内山・河口, 2021, p. 136) ことが指摘されている。このように国外で受講している留学生にとっての課題は日本人との接触機会、日本語使用機会の少なさであることがわかる。しかしながらその課題を克服するための実践報告はまだほとんど見られないのが実情である。

3. 授業の概要

以下、この授業の概要を述べる。授業期間は前半日程が2021年1月18日から3月10日、後半日程が2021年4月7日から6月2日であった。授業時間は時差やサマータイムなどを考慮し、前半日程は月曜日から木曜日まで毎日1コマ、日本時間17:30から19:00(オスロ時間9:30から11:00)、後半日程は月曜日と水曜日、各日2コマ、日本時間16:30から19:40(オスロ時間9:30から12:40)であった。受講者はオスロ大学日本語科の学生8人(男性3人、女性5人)で全員がコースを無事終了した。授業方法はZoomを使ったオンライン形式で、受講者の日本語レベルは、日本語能力試験(JLPT)のN3からN4程度だった。教科書はオスロ大学で使用中の三浦・マグローイン(2008)を使用した。オスロ大学でも日本語授業がオンラインで行われており、現地では訳読法をメインとした教育が行われている。そこで、オスロ大学で文法解説や読解、翻訳を、筆者が会話、聴解、漢字と役割を分担して行った。

4. 実践報告

先行研究からオンライン授業について様々な見解があり、少なからず利点もあることがわかった。しかしながら筆者は来日できていた場合の授業以外の時間が日本語習得にもたらす重要性を指摘したい。来日できていれば、日本で暮らし、日本の大学生と交流し、生の日本語に触れる機会を多く持てたであろう。留学生が日本に来て初めて知る語には、例えば「あざっす」や「ヤバイ」がある。「ヤバイ」は母国にいる時から知っていたが、日本に来てみたら意味がもっと広くて、使いこなすのが難しかったという声も聞く。またオリンピックのスケートボード解説で有名になったスベ、つまり「それマジヤバいっす」のような大学生が普通に話す日本語に、留学生は教室の外で触れ、日本語教科書に載っていない日本語を知る。また日本語教師が話す、スピードや語彙がコントロールされている日本語ではなく、「温めますか」「診察券お持ちですか」など自然に話される幅広い年齢層の日本語を聞き、そこから多くのことを学んでいく。オンライン授業の利点は認めるものの、来日できない状況では教室外で自然な日本語に触れるという肝心な部分が欠落してしまう。その部分を少しでも補うべく授業の中で少しでも自然な日本語を聞いてもらうため、いくつかの実践を行うことにした。そうした実践を通して、生の日本語に触れ、日本語で交流する機会を設けるよう努めた。

4.1 実践（１）日本語ゲストスピーカー

授業の最後 15 分間、日本語ゲストスピーカーを招き、好きなトピックを日本語で話した後、質疑応答を受けてもらうことにした。告知物を天白キャンパス、ドーム前キャンパスに貼り、名城大学 SA² (student assistant) の LINE で募集した。他大学の場合、大学生を集めることが難しい場合が多い。しかし名城大学の場合、SA という組織があること、また国際交流に関心が高い外国語学部の学生が多いことが幸いし、多くのゲストスピーカーが実際に話しに来てくれた。また大学生ばかりではなく、筆者知人の 50 代の大学教授、小学生、中学生、日本語が堪能なスリランカ人にも来てもらい、様々な日本語を聞いてもらえるよう努めた。その数は延べ人数で 26 人にのぼった。以下の表 1 は、ゲストスピーカーの所属とその日のトピックをまとめたものである。

表 1

ゲストスピーカーの所属とトピック

日付	所属	トピック
2021 年 1 月 19 日	外国語学部 1 年	自己紹介
2021 年 1 月 25 日	他大学 4 年	スリランカのマク ドナルド
	外国語学部 1 年	日本のお正月
2021 年 1 月 26 日	外国語学部 2 年	旅行
	外国語学部 3 年	私の家族と友達
2021 年 1 月 27 日	外国語学部 1 年	ジブリ映画
2021 年 2 月 1 日	外国語学部 1 年	好きな映画の感想
2021 年 2 月 2 日	外国語学部 2 年	名城大学での大学生活
2021 年 2 月 3 日	SA 3 人	節分
2021 年 2 月 4 日	他大学教授	沖縄観光
2021 年 2 月 8 日	外国語学部 3 年	2 月の日本のイベント
2021 年 2 月 9 日	法学部 1 年	ノルウェー語で自己紹介
2021 年 2 月 10 日	外国語学部 1 年	Word Wolf Game
2021 年 2 月 15 日	都市情報学部 2 年	和菓子紹介
2021 年 2 月 17 日	人間学部 2 年	自己紹介
2021 年 2 月 22 日	外国語学部 1 年	ノルウェーの歌手 アラン・ウオーカー

2021 年 2 月 25 日	吉本興業、小学 3 年	漫才
2021 年 3 月 1 日	中学 1 年	Japanese Slang & Young People's Language
2021 年 3 月 3 日	SA 2 人	ひな祭り
2021 年 4 月 21 日	国際化推進センター	缶コーヒー
2021 年 4 月 28 日	外国語学部 3 年	日本に関するクイズ

「漫才」では、吉本興業からゲストを招き漫才を実演した。その後、留学生が実際に漫才を作成した。「ねえ、ちょっとこのペットに座って」「え？ペットに座っちゃだめでしょ。それを言うなら触ってでしょ」のほか「かわいいとこわい」「洗ったと習った」など日本語の発音の似た語を使って漫才を楽しんだ。

「Word Wolf Game」は人狼のように少数派を探すゲームで、8 人のうち 6 人が卓球、2 人がテニスという語をあらかじめ与えられていて、日本語で質問をし合いながら誰が少数派かを探った。これは好評で「日本語のレベルに関係なく楽しめる」「自分が教師になったら是非取り入れたい」などの声が聞かれた。

「Japanese Slang」では中学生ゲストが最近の若者言葉、「マジ？」「推し」「それな」「びえん」の 4 つの語の意味と使い方を紹介した。留学生からは「「びえん」は絵文字から作られた語ではないか」という質問が出た。

「缶コーヒー」では日本の自動販売機と缶コーヒー文化が紹介された。鬼滅缶がブームだと聞くと「オスロでも鬼滅缶を買えます」との発言があった。留学生の 1 人はこのとき紹介されたスタンプを集めるコカコーラのアプリをダウンロードしたと言う。

「ノルウェー語で自己紹介」では、ゲストが日本語に続いてノルウェー語で自己紹介を行い留学生は驚いていたが、日本語ゲストの意欲の高さが伺えた。

「沖縄観光」では沖縄の文化や観光地が紹介された。ゲストが 50 代だったせいか「日本語が難しかった」「聞きづらかった」などの声が聞かれた。

この実践はオスロ大学の留学生にも好評で、毎回日本語での質問が 3 つ以上は出た。日本語ゲスト相手に日本語を使ってみようという積極的な姿勢が伺えた。この実践について、学期末にアンケートを取ったところ次のような声が寄せられた。一部抜粋して紹介したい。

- I must honestly say that I found every event and presentation to be helpful when it comes to learning about Japan, as well as interesting to listen to. Instead of only learning about Japanese culture through reading different texts, I prefer to learn it through events such as these.
- I really liked the speaking guests that used different kinds of visual medias, Power Point etc.
- I absolutely love all of the speaking guests that came to our class to present us part of Japanese culture.

中には「There were some that were harder to pay attention and understand what was being talked

about'のように理解が難しい日本語もあったという意見が見られたが、これは自然な日本語を聞くという意味ではいい経験であったろう。印象に残ったトピックとしては Word Wolf ゲーム、Japanese Slang、沖縄、ノルウェー語で自己紹介、漫才などが挙げられた。日本語教師が話す日本語と比べてどうかという質問では、以下のようにスラングが多いとかスタイルが違うなどの回答が見られた。教室の日本語と生の日本語の違いを少しでも感じてもらえたことは、この実践の効果と言えよう。

- The other students from Japan sometimes use slang and other words we haven't used. But they all used.
- I think the language was a bit different between the teacher and the students. I also feel like the way the students talked was different from the way we hear our teachers in Norway talk.
- Sometimes the teacher's Japanese was a little easier to follow, but I believe this came from me already being prepared on the topic under discussion, instead of the student's Japanese where the topic wasn't something I had looked into beforehand.

一方、日本語ゲストからは次のようなコメントが寄せられた。留学に行けず国際交流が難しいコロナ禍にあって、外国人と交流する場を設けることができたことはよかったのではないだろうか。

- 楽しそうに聞いてくれた。この活動に参加したあとで、オスロの学生と LINE を交換した。イベントごとに感想をシェアしたり、好きなものについて話し合ったり、素敵な交流になった。
- ワードウルフゲームを利用して日本語をたくさん話してもらう機会になれば良いなと思い共有した。留学生が積極的にゲームに参加くれて嬉しかった。
- すごく貴重な経験だった。

4.2 実践（２）日本の大学生へのインタビュー

この授業で使用した教科書の第 15 課は日本語でインタビューをすることがテーマになっている。15 課で学んだ日本語を実践で使うため、日本の大学生へのインタビューを実践した。コロナになる前、対面授業の頃は、インタビューを受けてもらう学生を集めることは至難の技であった。学生は授業やアルバイトで忙しく、時間を合わせる事が非常に難しかった。しかし今回はオンラインであること、また時差のため授業が遅い時間であったことなどが功を奏し、名城大学の日本語を母語とする大学生 7 人³（以下、本学学生と表記）が応じてくれた。インタビューは 2021 年 5 月 31 日 17 時から 18 時まで Zoom で行なった。ブレイクアウトルームに留学生がいて、そこに本学学生が入り、1 人 10 分インタビューを行った。トピックは以下の通りで、それぞれオスロ大学の学生が日本の大学生に聞いてみたい質問を事前に 5 個以上準備した。

表 2

日本語インタビューのトピックと質問

学生 A	ペットとペットカフェ	・日本ではどんなペットが人気があるか。 ・ペットを飼っている人は多いか。なぜか。 ・小さいペットと大きいペットとどちらの方が人気か。なぜか。 ・日本ではペットが高いか。 ・ペットカフェに行ったことがあるか。どう思うか。 ・ペットカフェが多いか。 ・どんなペットカフェが人気があるか。
学生 B	コロナと生活の変化	・コロナで何が変わったか。 ・コロナに対してどう思うか。 ・コロナで新しい趣味を見つけたか。 ・コロナ前に戻れたら何がしたいか。 ・コロナが終わったら一番やりたいこと。
学生 C	日本のお寺と神社	・今 X さんが住んでいる町にはいくつぐらいお寺や神社があると思うか。 ・日本の中でどのお寺か神社が一番好きか。 ・そのお寺か神社はどこにあるか。 ・いくつお寺や神社に行ったことがあるか。 ・1 年に何回ぐらいお寺や神社に行くか。 ・お寺や神社に行く理由は何か。
学生 D	旅行	・旅行するのが好きか。 ・旅行したら、海と山と都市と田舎の中でどこが一番好きか。 ・旅行する時、何が一番大事なことか。 ・たいていだれと旅行するか。 ・他の国に行ったことがあるか。
学生 E	K-POP	・K-POP が好きか。 ・K-POP のコンサートに行ったことがあるか。 ・K-POP と J-POP のどちらが人気があるか。 ・BTS の何の曲が好きか。 ・日本、韓国以外の曲を聞くか。
学生 F	たけのこの里 VS きのこの山	・きのこの山かたけのこの里どちらが好きか。 ・どんな時にきのこの山を食べるか。 ・マスコットのキャラクターを知っているか。 ・何歳の時きのこの山を初めて食べたか。 ・他の日本や外国のおやつは好きか。
学生 G	アニメと映画	・映画を見るのが好きか。 ・日本のアニメは今世界で有名で、流行っている。アニメをよく見るか。 ・好きなアニメと日本の映画は何か。 ・海外の映画で一番好きなのは何か。 ・字幕と吹替、どちらの方が好きか。 ・日本の作品と海外の作品は違うところがあると思うか。何が違うか。
学生 H	旅行	・旅行が好きか。 ・休み時、旅行するか。

		・日本で旅行するか。外国に旅行するか。 ・どこが一番好きか。 ・今、どこに行きたいか。
--	--	---

インタビュー結果は PPT にまとめて、最終スピーチとして 6 月 2 日に発表した。このインタビューも目的としては日本人と話すこと、自然な日本語に触れることであったが、その目的は概ね達成できたと思われる。この活動は留学生 1 人対日本の大学生 1 人なので緊張した留学生が多かったようである。アンケートを見ると「日本語でどう言うかわからなかったり、どう反応していいかわからなくて困ったときも、本学学生が親切に助けてくれた」などと書かれており、本学学生の親切で丁寧な対応への感謝が見られる。以下、アンケート結果の一部を抜粋して紹介したい。

- ・ Overall, they were all very willing to talk and answer my questions, and they all answered quite elaborately which I appreciated.
- ・ It was a bit difficult. I struggle with speaking Japanese, so I thought it was a bit troublesome. But they were all very kind and understanding.
- ・ Everyone was very kind and understanding. This was helpful in moments where I would panic and forget what to say or how to react, and the Japanese they used was easy to follow. In cases where I didn't understand something, they were very helpful, which is why I found this to be a positive experience.
- ・ I had a lot of fun interviewing the Japanese students, despite being nervous there were no problems and they were all very open and welcoming to talk.
- ・ I was nervous before the interviews, but everyone was really nice and gave good answers. I think this was a nice way to end the semester, and it made me less scared to talk Japanese.

中には‘It was a bit difficult’とか、‘I was nervous before the interviews’という意見もあるが、‘it made me less scared to talk Japanese’などの意見もあり、結果的に実践してよかったと言える。また本学学生からは「様々なトピックについて調べていたので、私もたくさん答えたいと思い参加した。中には難しいなと思う質問もあったが、良い意見交換が出来た」という感想が寄せられた。

5. 異文化交流「オスロを知ろう」の実践

オスロ大学の留学生と日本の大学生との交流をより深めるため、「交換留学協定大学のある街 オスロを知ろう」（以下、「オスロを知ろう」）という Zoom を介したオンライン交流会を実施した。本章では、その成果と課題について考察する。本交流会はオスロ大学生 8 人から名城大学生（以下、本学学生と表記）に向けてオスロを紹介するという内容であり、発表後にはフリータイムとして本学学生からの質疑をする時間を設けた。交流会は外

国語学部3年の渡邊芽依が進行を務め、2021年5月10日から6月2日までの毎週月曜日と水曜日に19時25分から19時40分までの15分間で計8回開催した。本学学生への告知は外国語学部事務室を通じてのポータルメールによる案内と、SAのLINEグループや学内掲示を通して行った。告知をする際には、より多くの学生の参加の参加を促し、言語の壁による抵抗を減らすために「日本語使用可」と記した。

全8回の発表者のトピックと参加者数は以下の通りで、述べ人数で97人、多い日で1日24人の学生が参加するなど非常に高い関心が伺われた（表3）（図1）。

表3

「オスロを知ろう」のトピックと参加者数

日付	トピック	参加者数
May 10 th , 2021	Edvard Munch & Henrik Ibsen	11 人
May 12 th , 2021	Tusenfyrd	12 人
May 17 th , 2021	A Norwegian National Holiday, 17th of May	8 人
May 19 th , 2021	Oslo Food Culture, Our recommendations	9 人
May 24 th , 2021	Oslo Technological Museum	5 人
May 26 th , 2021	University of Oslo	24 人
May 31 st , 2021	Akershus Fortress	11 人
June 2 nd , 2021	Oslo Student Apartments	17 人

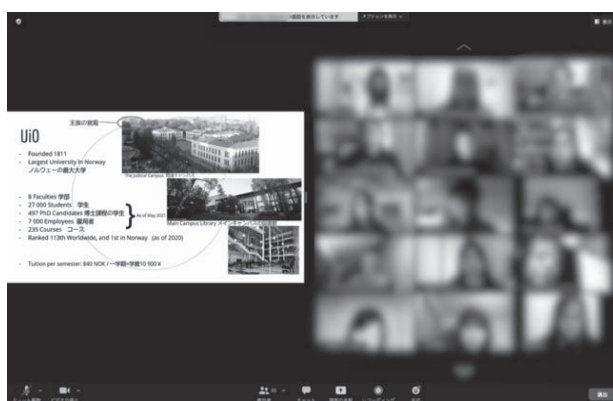


図1. 交流会の様子（2021年5月26日実施分）

参加した本学学生は42人で内訳は以下の通りである（図2）。内23人がSA学生であり、リピーターも多く、5回参加者3人、4回2人、3回3人、2回3人であった。

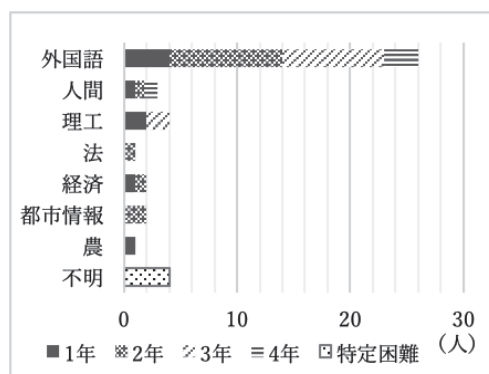


図 2. 学部別の参加者数

5.1 アンケート調査

本交流会の経験に関する感想と学びに関して、参加者（16 名）に事後アンケート調査を行った。対象者の内訳は、本学学生（9 名）、オスロ大学生（7 名）、名城大学教員（1 名）である。アンケート配布は全交流会終了後（2021 年 6 月 21 日）に行われ、各参加者が記名のうえ回答し、集計が行われた。質問項目は以下の 4 項目である（表 4）。なお、オスロ大学の学生にはコメントのみの回答収集を行った（表 5）。

表 4

本学学生および大学教員の事後アンケート結果

回答（抜粋）

質問 1 「オスロを知ろう」に参加しようと思ったのはなぜですか？

- 友達に誘われて参加したいと思った。海外に興味があり、オスロについて知らないことがたくさんあるので話を聞いてみたいと思ったから。また、現地学生と交流ができることに魅力を感じた。
- ノルウェーのオスロについてもっと知識を得たいと思ったし、オスロ学生を応援したかったから。
- 前にオスロ大学生に発表をして、今度は自分がオスロについて知りたいと思ったから。
- 留学ができない分、少しでも生の英語に触れてみたかったから。

質問 2 「オスロを知ろう」に参加することで、英語学習に対するモチベーションは変わりましたか？また、「はい」と答えた方は、理由を教えてください。

- 日本にいと、日常生活の中で英語に触れる機会が少なく、「話す英語」が上達しにくいと感じている。本来の目的は国際交流が主かもしれないけれど、オスロ大学の学生さん達の英語を聞いて自分の英語力を見つめなおす良い機会になった。
- オスロ大学の学生の英語のプレゼンを聞いて何か所か英語が聞き取れないところがあり、自分の英語力の未熟さを感じた。かなりモチベーションになった。
- 所々でしか話の内容が理解できなかったため、さらに英語力を伸ばしたいと思った。

質問 3 改善点があれば教えてください。

- 改善点は特にないと個人的に思う。
- (発表内容について) 少し日本語の説明があると良かった。
- ブレイクアールームを作るなどもう少し少人数での交流が良かった。

質問 4 意見、コメント (自由回答)

- オスロ大学の学生との国際交流を通して、オスロ大学やノルウェーの文化、施設などを知ることができた。留学先として北欧に行ってみたいという気持ちが強くなった。
 - 自分自身の英語力やコミュニケーション力を見つめなおす良い経験ができたけれど、結局質問できず終わってしまった。
 - 本学学生にはもっと質問をしてほしかったけど、学生にとっては本当にいい機会になったと思う。
-

表 5

オスロ大学生の事後アンケート結果

回答 (抜粋)
質問 Any comments are welcome.
▪ It was fun to be able to present a topic about Oslo. ▪ It was a pretty fun program and organizing it was fun too. I hope everyone had fun with the presentations and that they all learned some things! ▪ I was a quite disappointed that there was a clear lack of questions for the presenters. ▪ I was sad that there were many who did not have any questions for many of the speakers after their presentation, But I was happy to see many questions in my presentations.

5.2 分析と考察

参加者の所属学部により偏りがあったものの、アンケートからは、多くの学生がノルウェーに関心を抱き参加を決めたことがわかる。また、実践 1 の交流会でオスロ大学生への発表を経験し、継続して本交流会に参加し続けた学生や、自分自身の英語能力にも刺激を受けた学生がいたことが伺える (表 4)。これらはオスロ大学生からの発表が全て英語で行われたことや、発表を聴く中で授業では触れないような複雑な英語表現を体験したことによるものだろう。短い時間であったものの、オスロ大学生だけでなく本学学生にとっても相互の文化を発信し理解し合う有意義な経験となったと言える。

一方で、本交流会の目的である学生間の交流という側面から見た時に、本学学生からの質問や発言の少なさが目立つ結果となった。これは何名かのオスロ大学生からも事後アンケートで指摘されている（表 5）。各回の参加者数と質問数を示したのが以下の図 3 である。

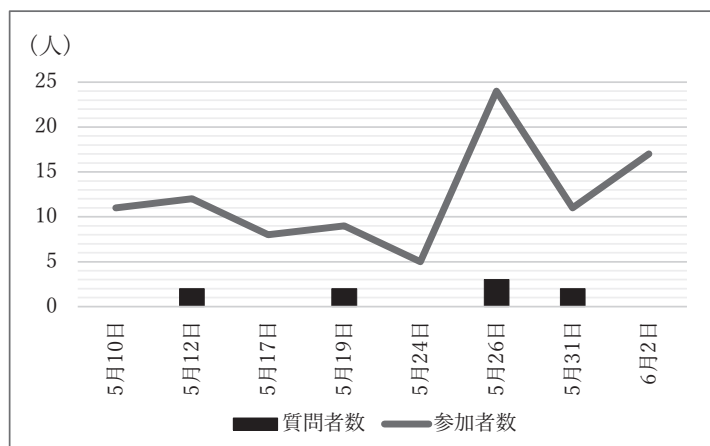


図 3. 各回の参加者数と質問数の推移

図 3 が示すように、参加者が 20 人以上であるにもかかわらず質問者が 3 人であったり、1 人もいなかった日もあった。先に述べたように、リピーターとして参加した学生も何名かいたが、毎回初めて参加する学生も多かった。つまり全体の人数にかかわらず、多くの学生がこういった場での発言に抵抗意識を持っていたと考えられる。また発言者は継続して参加していた学生に固定化される傾向にあり、初参加の学生が積極的に質問を行うことは難しいようであった。

国際交流においては、多様な視点からの発言が、より活発な交流を促す重要な要素であり、学生同士が積極的に意見交換をすることが望ましいとされる。そこで、本交流会での質問者の少なさが何に起因していたのかを、Zoom 機能が発言時の非言語情報伝達に影響を及ぼした「空間的要因」と、英語学習者として発言を躊躇してしまう「心理的要因」に焦点を当てて考察する。

空間的要因（環境的要因）

(1) Zoom の機能が生み出す発言のしづらさ

まず一つ目に、発言に伴って使われる Zoom 機能とそれに伴う行為への影響である。Zoom 上で発言するには、まず挙手や「手を上げる」機能を使う、またはミュートを解除して発言意思を伝えるなど、技術的操作が必要となる。同時に、Zoom では参加者の声が被ると特定の人以外の音が小さくなり聞こえづらくなるため、他にも発言者がいるかどうかを確認しながら行わなければならない。挙手をしてもすぐに発言権を得られるとは限らず、本交流会でも、司会進行する中で学生の挙手に気づくことが遅れることが度々起こった。

発言意思をもつ学生にとってはこういったプロセスが煩わしく、対面時以上に発言のための努力が必要とされるため、発言意欲を削がれた可能性がある。また、Zoom機能の特性上、発言者には色付きの枠がつくことで誰が話しているかが全員に知られるうえ、(現時点では)スピーカーから出る自分の声量を一人ひとり調節することは不可能である。そのため、対面時であれば自然に生まれていたであろう気軽な発言がしづらく、全員に聞かれてもいような発言しかできない空間になる。こういった発言に伴う Zoom 機能による話しづらい環境が、学生の発言数に影響したと考えられる。

(2) 非言語情報の伝達の難しさ

上述した Zoom の機能による影響に加えて、発言時の非言語情報の発信、及び受け取りのしづらさによる影響も考えられる。例として挙手について述べると、対面であれば、進行側が質問を促した際に学生の挙動や目線から送られる発言意思の合図を読み取り、その学生の発言を促すことができる。しかし Zoom 上ではカメラによる姿勢の固定や目線の不一致などから、参加者の非言語情報を適切に読み解くことがかなり困難になる。このことから、相手の姿が見えていても対面時のようなやりとりは難しい環境であったことが考えられる。

かつては、コミュニケーションは対面と非対面の二項対立的に考えられていたため、非言語情報が視覚的に受け取れる Zoom は、対面に近い状態で意思疎通ができるものと考えられていた。非対面コミュニケーションの代表例であるコンピューターを介したコミュニケーション (Computer-Mediated Communication : CMC) では、お互いが見えないことである程度は話しやすいものの、非言語要素が取り除かれる (Cues-Filtered Out) ために社会的な関係構築には不向きであるとされていた (Walther & Parks, 2002)。これは非言語要素が対話を円滑にすることを意味するが、先述したように、対面に近いはずの Zoom でも非言語情報の読み取りが難しく、参加学生にとっては、その適切な対応が難しいケースもあったのではないだろうか。Zoomは相手のことを視覚的に認識できるが、必ずしもそこで見られる非言語情報が双方向に円滑なコミュニケーションを生み出すとは限らないと考えられる。

心理的要因

(1) English Learner (英語学習者) としての意識

本学学生の発言に影響した心理的な要因の一つに、English Learner (英語学習者) であるという意識が強くあったことで、発言に対して受動的になったことが考えられる。オスロ大学生にも英語を母語としない学生も多くいたが、彼らは English User (英語使用者) として、比較的流暢な英語を使い発音や文法に躊躇うことなく話をしていただろうか。実際に、本学学生からの事後アンケート (表 4) では、オスロ大学生の英語力に感銘を受け、自分自身の英語能力を見直すきっかけになったという回答があった。このことから、オスロ大学生の使う英語と自身の英語を悲観的に比較し、English Learner としての意識が強まったことにより、学習者として一つの教材のようなかたちでオスロ学生の英語を聴いて

いたと考えられる。

英語学習者としての意識が発表を聴く最中の受動的な態度に繋がり、質問まで意識が向かなかったのではないだろうか。また、発表後の質問は日本語でも可能だと伝えていたがそのまま英語で質問をする学生が多かったため、英語でされた発表に対しては完璧な英語で返さなければならないというプレッシャーも影響していたと言える。学習者として向上意識を持つことは重要であるが、それが言語学習で重要とされる「アウトプット」の機会を奪ってしまうことはこういった実践的な場において避けるべきであるだろう。

(2) 他の学生の前での発言に対する消極性

もう一つの心理的な要因として、上記(1)で述べた、本学学生の English Learner としての意識の強さから、さらに集団の中で発言することに対して消極的に考えていることが挙げられる。日本の大学生の英語学習における不安要因の分析研究では、英語の専攻・非専攻にかかわらず、「間違ったり変なことを言って恥をかきたくない」ということが英語での発言に対する不安の最も大きな理由だと指摘された(河合, 2016, p. 24)。本交流会は毎回メインルームで行われたため、発言者の顔と発言内容は、参加者全員に常に表示され、認識される。対面時には他の外的環境(雑音や部屋の間取りなど)に意識が向き、ある程度注目度は下がるものの、Zoomではどうしても画面のみの限られた範囲に注意が向きやすく、発言者一本人が注目されやすい。こういった状況から、他の学生の前で文法や発音などを間違えることを恐れてしまい、発言時の消極的態度につながったと考えられる。

以上、「交換留学協定大学のある街 オスロを知ろう」という交流会における学生の発言の傾向の分析とその要因について考察した。この実践は、国際的な交流が途絶えている中で、本学学生にとって自然な英語に触れるという貴重な機会を作り出すことができたという点で意義のある実践であったと言える。しかし今回の実践により、空間的要因、心理的要因から言語学習者が発言を躊躇してしまうという実態が浮き彫りになったこともまた事実であるため、ウェブ会議ツールを通じた異文化交流のあり方の模索を今後の課題としたい。

6. まとめ

コロナ禍で来日できない中で、ノルウェー在住の留学生が少しでも自然な日本語に触れるように、また来日できていたら当然できていた日本の大学生との交流ができるよう幾つかの実践を行ってきた。事後アンケートの最後の設問、‘Did you enjoy the exchange with Japanese through this class?’では次のようなコメントが寄せられ、本学学生との交流を多に楽しみ、その経験は日本語学習の一助となったことが伺われる。

- I truly enjoyed the exchange with Japanese through this course, and I believe I have learned a lot and was able to develop my Japanese even further.
- Everything was very fun. Very very fun semester to be honest! I’ m looking to learn more

Japanese if I ever meet anyone who has been so kind to be in the classes.

- Overall it has been the most fun class I have had, every day we learned something new and met someone new and had a lot of fun. I hope next year's students also feel the same way!

この実践は一方で、外国語学部や SA など国際交流に興味があるものの現在留学に行くことができない本学学生にとってもいい刺激になったようである。本学学生へのアンケートの最後の設問、「なかなか国際交流ができない中で、オスロ大学プログラムは少しは国際交流に役に立ったと思いますか？例えばどこが役に立ちましたか？」では次のようなコメントが寄せられた。

- 海外の大学がどんな感じなのかを知る事ができた。
- 自分自身がヨーロッパ圏の学生と交流をしたことがない、ということや現状の中でもオンラインを通じてノルウェーについて知ることができた。
- オスロに友達ができたと、日本とは違う文化に触れることができて良かった。
- オスロ大学や海外の文化について知れて、是非行ってみたいという気持ちが湧いた。
- コロナ禍での世界を繋がっているということが感じる事ができた。
- このイベントを通して、国際交流をもっとしたいと思うようになった。オンラインでつながれるのは魅力に感じる。
- 北欧に行ってみたいと思う気持ちが強くなった。学生と交流をするのって楽しいと思った。

以上、ノルウェー在住の留学生在が自然な日本語に触れるための取り組みについて述べてきた。先行研究から国外で受講している留学生在にとっての課題は日本人との接触機会、日本語使用機会の少なさであることが明らかになった。その課題を克服するための実践報告はまだほとんど見られない中で、今回、日本に住む人と少しでも接触する機会、日本語使用機会を作り出すということに一つの道筋を立てることができた。そういう意味において、実践の意義は大きい。

また、本稿が外国語学部 3 年渡邊芽依さんとの共著である点も意義深い。留学に行けないうちで何かできないかと模索し、自ら企画を考え、高い英語力をもって実践した。更に実践を振り返り、考察を加えて論文としてまとめた。その実績と努力は高く評価されるべきである。

ただ、いろいろと工夫を重ねたとはいえ、オスロ大学の学生にとって日本語を使う機会は授業内に限られていたであろうことは想像に難くない。実際に来日できていれば、授業外の時間に自然な日本語に触れ、その経験は日本語習得に大きく寄与したであろうことを考えると残念でならない。一刻も早くコロナ禍が終息し、自由な往来が再びできるようになることを願って、本稿を終える。

謝辞

この実践に様々な形でご協力を頂きました外国語学部の教員、職員、学生の皆様、並びに国際化推進センターの職員の方々に感謝致します。日本語ゲストスピーカーとしてご参加くださった国際化推進センターの平田樹雷さん、ありがとうございました。また、異文化交流「オスロを知ろう」にご参加くださり、貴重な質問やコメントをくださいました外国語学部藤田衆先生、宮崎新先生、ポール・ウィキン先生、国際化推進センター小島悟さん、ありがとうございました。記して深く感謝申し上げます。

注

1. 補足は筆者によるもの。
2. スチューデントアシスタント制度（略称 SA）は、名城大学に在籍する外国人留学生の学業や学生生活などの支援を目的に発足した制度。
3. 内訳は法学部 1 年、都市情報学部 2 年、理工学部 3 年、外国語学部 3 年のそれぞれ 1 人ずつ、外国語学部 1 年 3 人の計 7 人。

引用文献

- 河合千栄子. (2016). 「英語学習に対する学習者の不安要因：専攻、性差、及びその変化」『久留米大学外国語教育研究所紀要』, 23, 15-40.
- 坂本勝信・谷誠司・山下浩一・内山夕輝・河口美緒. (2021). 「地域日本語教育における学習者と大学生のオンライン会話練習の試み—令和 2 年度常葉大学地域交流・連携推進事業—」『常葉大学外国語学部紀要<報告>』, 37, 131-152.
- 西野藍・布村猛・金山泰子. (2021). 「COVID-19 パンデミック下でのオンライン中級日本語コースにおける学び—インタビュープロジェクトとチュートリアル—の意義—」『ICU 日本語教育研究』, 17, 31-44.
- ヴァンバーレン・ルート. (2021). 「2020 年度春学期緊急的な遠隔授業のアンケート報告」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』, 36, 43-53.
- 三浦昭・マグロイン花岡直美. (2008). 『*An Integrated Approach to Intermediate Japanese* 中級の日本語 [Revised Edition]』, 東京：ジャパンタイムズ
- 吉田睦. (2021). 「オンライン初級後半日本語授業におけるストーリー作成」『ICU 日本語教育研究』, 17, 45-55.
- Walther, J., & Parks, M. (2002). Cues filtered out, cues filtered in: Computer-mediated communication and relationships. In M. L. Knapp & J. A. Daly (Eds.), *Handbook of interpersonal communication* (3rd ed., pp. 529-563). Sage.